

今週の為替相場見通し(2022年3月22日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		117.30 ~ 119.40	119.15	117.50 ~ 121.00
ユーロ (1ユーロ=)	(ドル)		1.0900 ~ 1.1137	1.1051	1.0800 ~ 1.1150
英ポンド (1英ポンド=)	(ドル)		1.3000 ~ 1.3211	1.3177	1.3100 ~ 1.3350
	(円)	*	152.92 ~ 157.23	157.03	155.00 ~ 158.00
豪ドル (1豪ドル=)	(ドル)		0.7165 ~ 0.7418	0.7415	0.7270 ~ 0.7520
	(円)	*	84.60 ~ 88.38	88.35	87.00 ~ 89.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 山口 朋子

(1)今週の予想レンジ: 117.50 ~ 121.00 円

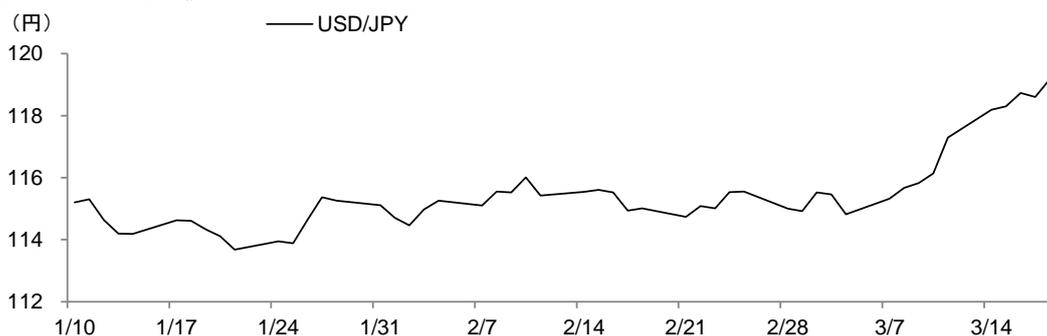
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

ドル/円相場は大きく上昇し、約6年ぶりの高値を付けた。週初14日のドル/円は117.53円で取引を開始。シドニー時間では週安値である117.30円で取引を開始し、ロシア・ウクライナの停戦協議進展への期待感からリスク回避の動きが後退すると、ドル/円は118円台まで上昇。15日には中国株の大幅下落やロシアがヘルソン州を制圧したとのヘッドラインに再びリスク回避の動きが加速すると、一時117円台後半まで急落。ただし、FOMCへの期待感からその後は底堅く推移した。17日にFOMCは予想通り25bpの利上げを発表。さらに、2022年に計7回の利上げを行う方向感が示されたことで米長期金利が急上昇し、ドル/円は119円台まで上昇。その後は伸び悩み、一時118円台後半まで反落した。18日に日銀は金融政策決定会合で政策の現状維持を発表し、発表後の記者会見で黒田日銀総裁によるハト派スタンスが確認されるとドル/円は再び上昇に転じた。海外時間にFRB高官によるタカ派発言が支援材料となると、ドル/円は再び119円台まで上昇。さらに週明け、21日にパウエルFRB議長がインフレ急伸への懸念を述べ、必要に応じて通常よりも大幅な利上げを行う可能性について言及するとドル/円は一時119.50円まで上昇し、高値圏での推移が続いている。

今週のドル/円は底堅い展開を予想する。FRBは2022年中に残り6回、2023年に3回の利上げを示唆し、さらにバランスシートの縮小に関しても5月会合で開始する可能性を示す等タカ派的な姿勢が確認された。今週はFRB高官からの発言を多く予定しているが、先週同様、タカ派発言が続くと、ドル買いの流れも継続するだろう。一方日銀による「商品価格の上昇で物価2%になっても目標達成ではない」、「必要なら追加緩和策を講じる」とハト派スタンスを維持。日米による金融政策の違いからドルは対円で引き続き先行される展開となろう。急激な円安に対し、先週日本政府は円安への警戒感を若干高めるような発言が続いたものの、黒田日銀総裁は「円安が日本経済にプラスとの構造は変わらない」と円安を容認する姿勢を貫いており、円安容認姿勢はドル/円をサポートするものと考えられる。一方で、引き続きロシア・ウクライナ情勢への警戒感も強い。足許では停戦合意への期待感が高まっているものの、市場が再びリスク回避に傾いた際の円高には注意が必要。今週の注目の経済指標は23日(水)米2月新築住宅販売件数、24日(木)米2月耐久財受注となっている。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/14~3/18)の値動き: 安値 117.30 円 高値 119.40 円 終値 119.15 円



2. ユーロ

(1)今週の予想レンジ: 1.0800 ~ 1.1150 130.50 ~ 133.50 円

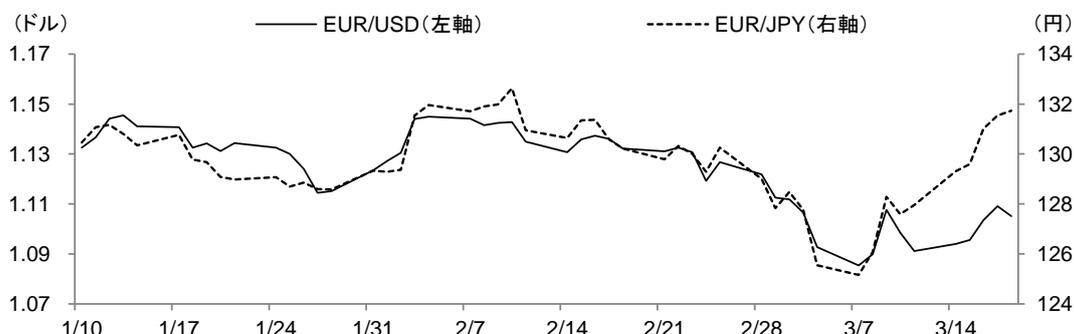
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に高値をつける展開。週初14日、1.0935付近でオープンしたユーロ/ドルはオープン後に下げ幅を拡げ一時週安値の1.0900をつけるも、ロシア・ウクライナを巡る平和交渉への期待感からリスク回避の動きが後退、欧州株の堅調推移が支援材料となり1.09台後半まで急上昇した。その後は米金利上昇に伴うドル買いに押され1.09台半ばまで反落した。15日、ユーロ/ドルはじり高に推移し、欧州時間に1.10台前半まで上値を切り上げた後、米長期金利上昇に伴うドル買いに押され再び1.09台前半まで下落、上値の重い展開となった。16日、ユーロ/ドルはタカ派的なFOMCの結果や米金利上昇を受けて一時1.09台半ばまで下落するも、その後は、欧州株の堅調推移やポジション調整によるドル売りから1.10台半ばまで反発した。17日、ユーロ/ドルは米長期金利の急低下やポジション調整によるドル売りが支援材料となり週高値の1.1137まで急伸。その後は複数の米経済指標の良好な結果にドル買いが進み、1.10台後半まで値を下げた。18日は、欧州時間からドル買い戻しを受けて下落。その後もFed高官からタカ派寄りの発言を受け1.1004まで一時下落。その後は、ユーロ/円が上昇する中、ユーロ/ドルも反発し、1.1051で越週した。週明け21日は、小動き。日中は狭いレンジでの推移が続いた。その後、パウエルFRB議長の講演内容を受け米短期金利が上昇する展開に、ユーロ/ドルは1.1010まで反落し、1.1017でクローズした。

今週のユーロ/ドル相場は軟調地合いを予想する。ウクライナ情勢によって各国の経済見通しに対する不透明感が高まっている。地理的にも近い欧州については、天然ガスの供給問題も抱えており、足許の天然ガス等資源価格の高騰は、インフレ率の上昇と景気減速というスタグフレーション懸念を連想させる。他方、先週行われたFOMCでは、予定通りの利上げを開始。今年7回の利上げ幅がドットチャートに示されたことで、毎会合の利上げに加えて+50bpの利上げがどこかの会合で実施されるインプリケーションを与えられた。QTについても次会合で開始される予定など、しっかりとタカ派姿勢を示すことができたFedに対し、地政学的リスクを抱えている欧州地域のECBでは金融政策の折り込み方も異なるだろう。よってユーロ/ドルは、相対的な金融政策の姿勢や、ウクライナ情勢を背景にユーロ安地合いが継続しそうだ。一方で、ユーロ/円については、底堅い推移を予想。金融政策の相対的な立ち位置に加え、エネルギー価格上昇などを受けた本邦貿易赤字の定着や1月の経常収支赤字が▲1兆1887億円と2か月連続で赤字となったことで、円先安観も加わっており、ユーロ/円相場の下値は限定的だろう。尚、今週は24日(木)にユーロ圏3月PMI、25日(金)に独3月IFO企業景況感指数が発表予定、週末には欧州が夏時間へ移行予定となっている。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/14~3/18)の値動き: (対ドル) 安値 1.0900 高値 1.1137 終値 1.1051
(対円) 安値 128.09 高値 131.95 終値 131.67



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.3100 ~ 1.3350 155.00 ~ 158.00 円

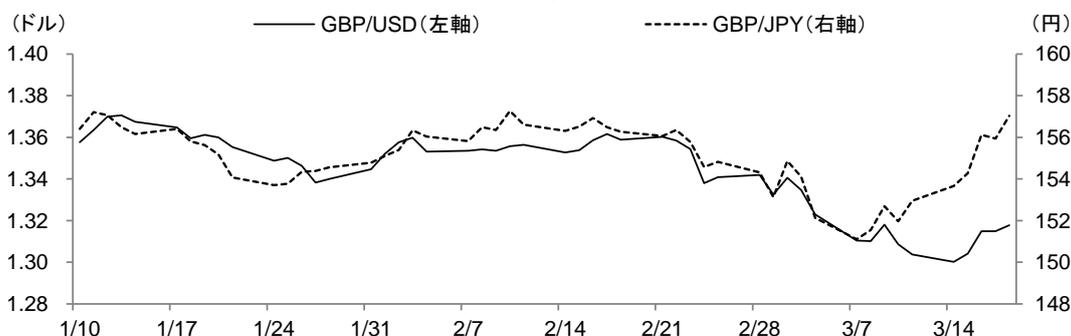
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対円でほぼ一方的な上昇。対ドルでも上昇が先行したものの、週後半にかけ頭打ち。対ユーロでは断続的な下押しを重ねたものの、週引けに掛けて反発、週を振り返ると小幅安に終わった。金融市場全般の関心は、引き続きウクライナ情勢に集まっていたものの、先週は、米連銀公開市場委員会(16日)、英中銀金融政策委員会(17日)などの注目材料もあった(日銀金融政策決定会合(18日)も開催された)。ただし、金融政策動向が、その通貨に最も大きなサポートを与えたのは、理事会が予定されていたわけではない欧州中銀だったようだ。ラガルドECB総裁が、17日、ウクライナ戦争が「新たなインフレトレンド」を生み出すリスクに言及。「計画を見直す用意がある」との発言は、2022年中の利上げの可能性を除外しないという趣旨と受け止められた。更に、同日、オランダ中銀のクノット総裁が、22年中に「2回の利上げに踏み切る可能性も排除しない」と述べた。米連銀の利上げ開始(+25bp)も、英中銀の追加利上げ(+25bp)も市場の予想通りで(日銀の金利据え置きも)、事前の織り込みは進んでいたはずだが、欧州中銀首脳の一連の発言は、市場の意表を突いたということであろう。円全面安の要因にも、目新しさはなかったものの、主要国の長期金利が一斉に上振れる局面で、日本の長期金利だけが当然のように上げあぐねている事実や、燃料価格の高止まりが日貿易/経常収支に与える影響などが円売り要因として大きな説得力を持った。

今週の英ポンド相場は、対ドルで堅調、対円で頭打ちから横ばい、対ユーロで軟調を予想。先週の英中銀金融政策委員会は、今になって値動きを振り返ると、利上げ発表直後は主要通貨に対して全面急落だった。米連銀公開市場委員会が(総意としての)長期的な政策金利の落ち着きどころよりも、向こう2年の同金利が上振れると見込んだことが、物価抑制のための積極的な利上げを先行させると受け止められたのとは対照的に、同じ+25bp利上げ決定でも、英中銀は金利据え置き票が一票(カンリフ委員)入り、目先の追加利上げに慎重な姿勢を示したことが、「想定よりもタカ派的でない」と受け止められたようだ。それでも、週を振り返れば、対ドルでも明確に水準を切り上げたポンドに、地合いの底堅さを読み取ることができるよう思われる。一方、「予想以上にタカ派的」と読まれた米連銀も、対円でこそ大幅なドル高につながったものの、上述の通り、この値動きは円側要因によるもので、対ユーロなどだけでなく、南ア・ランド、メキシコ・ペソなどの新興市場通貨に対してもドルは軟調推移を一巡させた。6営業日で+2.8%というドル/円の騰勢は、近年では珍しく、意外感が強かったが、仮に、対円でドル急騰という推進力を失った場合、ドルの全面的な調整安を加速させる可能性は高いのではなかろうか。米連銀公開市場委員会後の(対円を除く)ドル軟調は、教科書的な「噂で買って、事実で売る」値動きと言えたが、利上げに対する期待値が低く、市場の織り込みも遅れている欧州中銀の年内利上げ開始観測が、今後も燦り続けるようであれば、当面の間ユーロが堅調に推移する可能性は低くないように思われる。英経済指標は、今週、22日(火)に英2月財政収支、23日(水)に英2月CPI、25日(金)に英2月小売売上高などの主要経済指標の発表が並ぶが、英中銀が追加利上げに及び腰な姿勢を示した直後で、余程意外感の強い数字が並ぶことがなければ、ポンドが大きな反応を示す可能性は低いのではなかろうか。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/14~3/18)の値動き: (対ドル) 安値 1.3000 高値 1.3211 終値 1.3177
(対円) 安値 152.92 高値 157.23 終値 157.03



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7270 ~ 0.7520 87.00 ~ 89.50 円

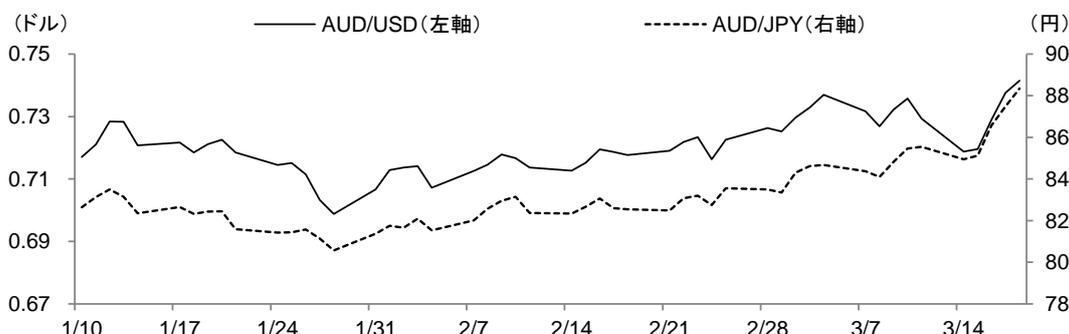
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.71台半ばから0.74台まで大きく上昇した。14日、中国深圳市の都市封鎖やコモディティ価格の軟化を背景に豪ドルは売りが優勢に。米2年国債利回りが1.86%を超えて2019年7月以来の高水準を付ける中0.7190近辺まで下落。15日、ウクライナ・ロシア間の停戦交渉が継続していること等を手掛かりにコモディティ価格の急騰が一服する中、中国によるコロナ感染者急増を受けた規制強化の動きなどが懸念材料となり、終日、方向感の無い値動き。16日、英紙FTによる「ウクライナとロシアの交渉は著しい前進を遂げつつある」との報道を受けて0.7275近辺まで上昇。注目されたFOMCでは予想通り+25bpの利上げが発表されFF金利を0.25%~0.50%とし、年末までの政策金利見通し中央値を1.75%~2.00%とするドットチャートを発表した。発表直後は株式、債券ともに荒い値動きとなり、豪ドルは一旦0.72ちょうど近辺まで下落したが、パウエルFRB議長が会見で経済成長見通しに楽観的な姿勢を示したことが好感され、株価は引けにかけて買いが強まり、豪ドルは0.73ちょうど手前まで上昇した。17日、豪2月雇用統計は雇用者数が予想を大幅に上回り、失業率は4.0%と14年ぶりの低水準に、更に労働参加率も前回から+0.2ppt上昇し、労働市場の強い回復を印象付けた。株高も相まって豪ドルは終日通じて買いが優勢の展開となり、0.73台後半まで上昇。18日、FED高官によるタカ派発言などをきっかけに米短期金利が上昇すると、米ドル高の流れが更に強まり、豪ドルは一時0.7360近辺まで下落したが、株価が引けにかけて上昇すると豪ドルも買い戻されて0.7420近辺で引けて越週。

今週の豪ドルは、もみ合いを予想。先週はロシア・ウクライナ停戦協定への期待、FOMCイベント通過後のリスクオン、良好な豪雇用統計等がきっかけとなり、豪ドルは大きく上値を迫る展開となった。今週は目立った経済指標の発表は無いが、パウエルFRB議長、ラガルドECB総裁、ロウRBA総裁等の主要中央銀行メンバーによる講演が予定されており、注目される。特に22日(火)に予定されているロウRBA総裁による講演では、これまで明確なコメントを避けていた今年中の利上げ開始に関して、より確度の高い発言が出てくるかどうか注目される。豪ドルは基本的に底堅い値動きを想定するも、0.74ちょうどレベルで一旦もみ合いを予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/14~3/18)の値動き: (対ドル) 安値 0.7165 高値 0.7418 終値 0.7415
(対円) 安値 84.60 高値 88.38 終値 88.35



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。